

青春。この甘美で疎ましい言葉。誰しも一度はそう言われる年頃はあるのだろう。自分のことを振り返るとそんなものはなかった気もするし、今も青春中という妙な心延えもある。

18歳で東京に出た時は無類の解放感の中にいた。しかし、未来に対する自惚れ楽観とは裏腹に、身の置き所なく腕いてばかりであった。美術学校にも馴染めず、ひとりでは潰しは潰しの繰り返し、一向に作品も溜まらない。青春を謳歌する

という言葉の明るさなどは無縁、青春の蹉跌、真ただ中であつた。

坂口安吾の「暗い青春・魔の退屈」。まさしく暗い青春であつた。ぎりぎりに張り詰めた危うさから虚無への逃亡をはかるも、概念に留まり行けず。しかしま

た、自分は壊れないという、絵を描く身体性に支えられた楽観もどこかにはあつたのだ。

一方、魔の退屈。単に退屈で言えば、何をすることもしないにも見るといふ行為だけは身に付いていたし、常に動きを止めない葛藤もあつて、自分の中にそんなものが入り込む余地はな

青春

つた。以来、時間を持て余すとか、「さあ、明日は休みだノ」などと晴れ晴れする感覚は僕にない。

二十歳の頃、東京から宇和島への帰省中。あざとくて映画の一齣にも使えないような出来事があつた。当時、予讃線の座席は4人掛けの対面式だったのだが、松山で2人の少女が乗って

きて向かいに座つた。小学2年と5年生くらいか？姉妹のようでもあるが顔は似ていない。子供だけというのも珍しい。

2人ともきちんとお洒落をして行儀良く奇麗。チラツとはにかみ、待ちかねていたようにハンカチで包ん



だ弁当を開く。上の子はおにぎり、下の子はサンドイッチ。その違いまでが微笑ましい。無垢なままの何ともかわいいた人の姿や仕種に、僕は知らぬ顔を装いながら目を注ぐ。

やがて夜の帳は下り、窓ガラスは結露して曇っ

た。声を掛けるなんてできる僕ではなく、心の内で「名前は何で言うの？」と聞いてみた。途端、上の子が、うっすらと濡れた窓に「伊都子」と指で書いたのだ。あまりの偶発に僕はウツと息を呑み、たじろいだ。こんなことがあるとは。

外の暗さが名前の形にくっきり透ける。2人は宇和町で降り、取り残された僕は、少しずつぼやけてゆく指跡を見続けた。

伊子の都の子。この名前から、思ってもなかった望郷心が呼び起こされたのか。それとも愛くるしい2人にカタルシスを覚えたのか。夜汽車での奇跡。今も鮮烈に蘇る。

二度と若い頃に戻りたくはないが、僕にもひとつの青春があつた。

(吉田 淳治・画家)